

なじみの色

村上 三次郎 ミノルタ㈱

1930年代コダックの研究者が風景写真の色を積分すると、各部が極彩色であっても灰色になると発表をしています。色彩調和はこれが基本と考えていました。さらに、森林の緑、海岸の黄色い砂と青い空、都会の白いビルや赤い広告等に馴染んだ生活環境が人の感覚を育てたり、生後の成長に従って変化する生活習慣が経験となり感覚に影響を与えていると考えています。

子供の時はよく風邪を引いていたので、布団の中から見える色は、天井の木目の濃い茶色と木肌の薄い黄色、襖絵の薄黄色の地肌に描かれた墨絵、床の間の掛け軸の虫食いのある墨絵が季節により鶴亀、菖蒲、鯉、滝見と変わり、障子の棧と白い障子紙、畳の蘭草の黄色と枠の濃い色に金の細い線、暗い仏壇の色でした。元気な時は海岸で遊び、浜の薄い黄色を帯びた砂、穴を掘ると水を含んだ黒い砂、木造の漁船、網置き場の赤錆びたトタン屋根の小屋、浜辺で赤い網を修理している老人の赤銅色の腕と顔、海の碧、白い雲、対岸の和歌山の街のコンクリートの建物の白と明るい屋根の赤、淡路島の山は濃い緑がもやでかすんでいる、こんな色に囲まれて昼飯以外ずっと海で過ごしていました。

須磨の裏山では樹林の濃い緑、薄い緑、黄緑、樹の幹の各種の茶、薦の緑茶色に囲まれて座っていたり、草花を植えない庭では、ヤツデ、シュロ、松、楓、偽アカシア、桑等の四季の木々の色の中で過ごしました。

人は環境の色配列を許容し、昔からの生活環境になじんだ配色を色彩調和とする考えに同調します。ジャッドの色彩調和「なじみ」はこのように理解します。成人してからは、真っ赤な車、ピュアホワイトのシャツ、黒いカバン、鐵紺の背広、濃いブルーのスウェット等を好んで身につける生活をするようになりました。子供時代はイエローベースの中で生活し、成人して私好みはブルーベースに移行した模様です。

色名をたくさん使った文となりました、マンセル値かxy値で表現すると色は正確に伝わることを実感しました。しかし数字ばかりでは味気ない文章だろうな。

赤と緑の狭間

一色覚の多様性と美術色彩教育一

市原 恭代 宝仙学園短期大学造形芸術学科

紅葉の季節が訪れる。緑や黄や紅赤の木の葉が宙に舞う。どれだけの色がこの中に見い出せるのだろうか。

毎年、美術系の学生に色彩感覚演習をしていて悩むことがある。色彩理論を教える時には、あれほど明快だった色相の概念が、色彩計を用いて厳密に行っていくと20人のうち15人から17人位にしか感覚的には実践されない。赤と緑の色の差は一定ではないのである。

光刺激としての物理的側面を研究している時には非常に単純だった色彩が複雑怪奇な難物となる。絵画やデザインの場合、一色だけで表現されることはまずありえない。背景の色の上に違う色で形が描かれ、様々な色と形が相互に働きあって全体の「絵」が認識される。ある色と他の色との差が人によって異なれば、全体の認識は少しずつ違ってくるはずだ。赤と緑の間に何百もの色を発見し、とてもかけ離れた色と色に感じる人もいれば、小さい差しか感じない人もいる。

しかし、色覚にヴァリエーションがあることは、良いことである。同じものを見ても百人が百通りの絵が描けるのは、まさしく、色覚、明暗覚、立体覚、運動覚、etc.が少しずつ異っているからである。認識の仕方が様々であることが個性を生み出す。そして、聴覚のいい人間が音楽家になるわけではないように、必ずしも差を大きく感じるものが優れた芸術家の素質ではない。外界に数百万の色が見分けられたとしても、画家はそれを全部描くような無駄な作業はしない。的確な省略と強調によって、自分の認識した世界を表現していくのである。色彩調和を考える時、様々な意見がある比率で出てくること。色相の組み合わせによって文字や意味のある図形が認識されるデザインの場合は、致命的な欠陥となることもあり得るということ。どうか、美術色彩教育に携わっている方々、公共のデザインをされる方、カラーコーディネータの方々は色と色との間の距離に個人差があることをもっと研究して欲しい。色と色の差が人によって異なるからこそ、色彩の調和をはかる仕事为社会には絶対に必要なのだと私は考えているのである。